

# ひたちなか 埋文だより

# 39



**三反田蜆塚貝塚の鹿角製髪針** みたんだしいづか かみばり 三反田蜆塚貝塚からは1999年の発掘調査で、骨角器の髪針が出土しています。2点のうち、幅広で矢羽のようにも見える端部の形状は、立木貝塚たつき（杉原・戸沢1965）\*に類例があり、縄文時代後期のものと考えられます。鹿の角を削って磨いたばかりの当時の色調は真白で、これに赤漆が塗られた櫛が組み合うのかもしれない。頭上の三角スケールは、その色見本ということにもなるのでしょうか。  
（2013.8.24 撮影 博物館実習 「女子大生と装身具」第4弾）

CONTENTS

## 特集「市内遺跡の調査」 調査報告書ができるまで

「出会い、別れ、そして夢考古学の旅路」第11回 勝田市の遺跡の調査（4）（川崎純徳）

展示資料紹介 鷹ノ巣遺跡のアメリカ式石鏃—茨城県の資料に窺う威信財としての変化—（鈴木素行）

1ケース・ミュージアム27 ひたちなか市で焼かれた天平の壺・遺跡めぐり 下野の古代寺院跡を巡る

横穴墓を歩く⑩ 泉崎横穴墓（嶋村一志）

1ケース・ミュージアム28 0（ゼロ）からの縄文原体

ひたちなか市の古墳② 海岸線の古墳群

歴史の小窓⑩ 村の仏教行者

虎塚古墳花便り⑩ ホタルブクロ

ほか

\*杉原荘介・戸沢充則 1965 「茨城県立木遺跡」『考古学集刊』第3巻第2号 35-72頁

## 特集 「市内遺跡の調査」

# 調査報告書ができるまで

ひたちなか市では、遺跡に住宅やアパートなどが建築される際に、国費補助事業として市の予算によって事前の試掘調査を実施しています。毎年、一五件ほどの試掘調査が市内のどこかで実施されています。試掘調査によって、住居跡などの遺構が確認された場合、その保存が難しいときには、発掘調査が行われます。



市内には三二六の遺跡があります。遺跡で土木工事がなされる場合には、市教育委員会の委託を受けて、(公財)ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社により試掘調査が行われています。

ここでは、金上にある大房地遺跡おおぼうちでの調査を見ながら、試掘調査がどのように進んでいくのを見えていきましょう。



まず、調査地にひもを張って、掘る部分を明らかにします。次に重機を使い、その部分の表土を、遺構が確認できる深さまで、取り除いていきます。



ひもを張った部分が掘りあがりました。



掘り下げた部分はトレンチといえます。トレンチの表面をきれいにしたら、土坑とピットが見つかりましたので、白いひもを張ってはつきりとわかるようにします。



見つかった遺構は一号土坑とピット一と名付けました。一部を掘り下げたところ、土坑から縄文時代後期の土器が、ピットから江戸時代の陶器が出土しました。



調査区の様子や発見された遺構を、図面や写真に記録していきま





ひらなか市教育委員会の  
栗田でございます。

いつも埋蔵文化財調査では皆様にご理解ご協力いただき、深く感謝いたしております。おかげさまで貴重な文化財を未来の子供たちに残すことが出来ます。今後とも皆様のご理解ご協力をお願いします。



調査の記録をすべて取り終えたら、調査地を重機で埋め戻します。これで現地の確認調査は終了です。



実測作業を終えた遺物は、「アンプバコ」と呼ばれているコンテナ箱に納められ、出土した遺跡名を書いた札を付け、埋蔵文化財調査センター二階の収蔵庫に収蔵されます。



埋蔵文化財調査センターに持ち帰った遺物は、すぐに洗浄し乾燥され、一点一点、出土した場所を記入します。その後接合作業を経て、実測作業を行って図面化します。



印刷用の図面や報告文を、パソコン上で割り付けて、報告書の原稿を作成します。それを印刷すれば、ようやく報告書の完成です。



現地で記録した図面類や、実測された遺物の図面は、ペンやパソコンなどを用いて、清潔さ、印刷用の図面が出来上がります。



展示のようす

日時 平成25年  
5月17日[金] ▶ 7月7日[日]

休館日 月曜日（祝日の場合は翌日）  
開館時間 午前9時～午後5時（入館は午後4時30分まで）  
入場無料  
場所 ひたちなか市埋蔵文化財調査センター  
〒312-0011 茨城県ひたちなか市中原3499  
☎ 029-278-8311

ひたちなか市で焼かれた  
天平の葺  
てんびょう いらか

1 CASE MUSEUM vol. 27  
遺跡巡り  
参考展示

ひたちなか市足崎には、奈良時代の天平年間（八世紀前半）を中心に瓦を生産していた原の寺瓦窯跡があります。当展示では、原の寺瓦窯跡から発掘された資料をもとに、生産の全体像を四つの時期に分けて考えてみました。

**原の寺Ⅰ期**（七二〇年頃） 二号瓦窯跡が該当します。当期の平瓦は、格子目や縄目を持ちますが、これは格子目を刻んだり縄を巻いたりした叩き板で叩きしめた際に付いた模様です。叩くことで焼く前に充分乾燥させることができ、窯で焼いたときに割れることが少なくなるのです。格子目瓦は水戸市にある台渡里廃寺跡から出土していますので、寺院の造作に伴い、瓦の生産が開始されたと考えられます。

**原の寺Ⅱ期**（七三〇年頃） 一号・四号・五号工房跡が該当します。当期になると平瓦は両面に糸切り痕を残す薄い瓦になります。この瓦は厚さが薄いために叩きしめる必要がなかったようです。そのため瓦の素材となる粘土板を粘土塊から糸で切り離した痕が瓦の表裏にそのまま残っています。Ⅱ期の瓦は、薄い平瓦や、類例のない文様を持つ軒瓦など、Ⅰ期の瓦とは大きく変化していますので、Ⅱ期になってどこから新しい技術が持ち込まれたことは明らかです。しかしそうした技術がどこから来たのかは、残念ながらまだ解明されていません。ところで両面に糸切りを残す平瓦は、那賀郡の正倉跡か

ら出土しています。特に原の寺瓦窯跡からⅡ期以後に出土する文字瓦は、那賀郡正倉院（水戸市台渡里廃寺跡長者山地区）の法倉と呼ばれる長大な倉庫跡から出土していますので、原の寺Ⅱ期の変化は、こうした瓦葺正倉の造作によるものであった可能性があるでしょう。

**原の寺Ⅲ期**（七四〇年頃） 二号工房跡、六号工房跡、一号瓦窯跡が該当します。Ⅲ期はⅡ期の瓦と同じような瓦が焼かれていたようです。一号瓦窯跡からは「十」・「津田」・「丈」などの文字瓦が出土しています。これらの文字瓦は那賀郡正倉院からも出土しますが、那賀郡正倉院（水戸市田谷廃寺跡）からの出土も目立ちますので、原の寺Ⅲ期には正倉院の瓦も多く焼いていたのかもしれませんが。

**原の寺Ⅳ期**（七六〇年頃） 三号工房跡が該当します。ただし三号工房跡は瓦が出土しておらず、また床面に粘土もみられないので、工房跡ではない可能性もあります。原の寺瓦窯跡西区からは、素文縁重弁五葉蓮華文軒丸瓦が出土しています。この瓦はⅢ期の一号瓦窯跡から出土している素文縁重弁六葉蓮華文軒丸瓦が変化したものと考えられていますので、西区から出土した素文縁重弁五葉蓮華文軒丸瓦をⅣ期に位置づけてみました。なおこの瓦は、水戸市田谷廃寺跡から出土することから、Ⅳ期もⅢ期に引き続いて那賀郡正倉院の瓦を焼いていたのかもしれない。（佐々木義則）

## 下野の古代寺院跡を巡る

―道忠ゆかりの大慈寺・下野薬師寺を歩く―

二〇一三年度のひたちなか市埋蔵文化財調査センターの遺跡めぐりは、ひたちなか市内に所在する奈良時代の瓦窯跡である原の寺瓦窯跡や、集落遺跡から出土する仏教遺物の価値を、あらためて知る機会になればと思います、五月十七日に栃木県にある二つの古代寺院跡を訪ね、奈良時代から平安時代にかけて、古代仏教がどのようにに民衆へ広まっていったのかを考えることとしました。

遺跡めぐり当日はお天気恵まれ、午前中は



上：大慈寺 下：下野薬師寺跡

栃木県岩舟町の**大慈寺**境内を歩き、午後は下野市の**下野薬師寺跡**を訪ねました。

**大慈寺**は、平安時代初めに仏教が民衆の間に広まり始めたとき、東国における民衆の一大仏教センターとなった寺院です。大慈寺は鑑真の弟子**道忠**により創建された可能性のある古代寺院であり、古代から現在までその法灯を伝えています。また大慈寺は八一七年に天台宗の開祖**最澄**が訪れたことでも有名な寺院です。遺跡めぐりに参加された皆さんは、平安初期の仏教史にとつて重要な舞台を歩きながら、古代に想いをはせていたようです。また、あわせて近くの**村檜神社**も訪れ、その美しい建築も味わうことができました。

**下野薬師寺跡**は、奈良時代、僧が正式に受戒できるようになるため、国家により「**戒壇**」が築かれた、古代東国を代表する国家的な大寺院跡です。道の駅しもついで食事を済ませた遺跡めぐり一行は、まず遺跡に隣接する下野薬師寺歴史館を訪れました。そして遺跡ガイドの方の解説を聞きながら、館内の展示や復元された回廊の見学など、一時間半近くにわたり古代の遺構や遺物を楽しみました。

(佐々木義則)

歴史の小窓 その二

## 村の仏教行者

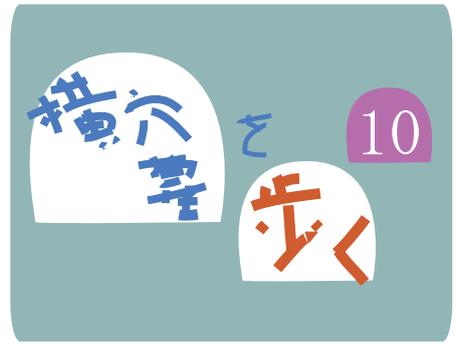


これは、ひたちなか市**武田石高遺跡**第一六号住居跡から出土した、平安時代前半頃の鉄鉢形の土師器鉢です。住居の**竈**内から出土しているので、おそらく割れた後に**竈**の補強材として用いられたのでしょう。現代の**托鉢僧**が手に持つ鉢と同じ形をしたこの土師器鉢は飲食具なのですが、僧侶の持ち物、もしくは仏前への供え物だったと思われる。いずれの用途にせよ、そうした仏具が**竈**の補強材に再利用されているということは、この住居跡の居住者と仏教との深い関わりを物語るものでしょう。あるいは平安時代前半の**武田石高遺跡**には、村にあった小さな**仏堂**で、密教の呪文である**陀羅尼**を唱えるような、**仏教行者**が住んでいたのかもしれない。

(佐々木義則)

参考文献 関根俊二〇〇一「**仏鉢考**」―法隆寺・東大寺の遺品と飯食器への形式展開― 『奈良学研究』四 帝塚山大学、平川南ほか「フォーラム「今、古代史がおもしろい」」(研究連絡誌)五七号 千葉県文化財センター 二〇〇〇年)での笹生衛氏発言





福島県泉崎村  
泉崎横穴墓

嶋村 一志  
(泉崎村役場)

泉崎横穴は、泉崎村中央に位置する東北本線泉崎駅の東方約2kmに所在し、村を東流する一級河川泉川左岸の丘陵上（白石山）に造られている。昭和八年十二月、道路工事に伴ってほか四基の横穴とともに発見され、白河中学校教諭の岩越二郎ほか地元研究者数名と文部省嘱託の上田三平、東北大学文学部嘱託の伊東信雄らによって調査された。調査の結果、四号横穴玄室内部に赤色顔料によって描かれた騎馬人物や渦巻などの壁画が発見されたことから東北地方最初の装飾壁画として翌年五月一日に史跡泉崎横穴として指定された。

玄室の平面形は、幅約2m、奥行最大長約2.1mのやや長方形を呈する。立面形は、四壁がほ



史跡泉崎横穴

ぼ垂直に立ち上がり、天井部との境に外側に突出する段をもつて隅降棟を示す四本の線が天井頂部で交わる宝形造の家型を呈する。

四壁の高さは0.5〜0.6mと低く、天井の高さをもっとも高いところでも1.16mしかない。屍床は、奥壁（東壁）と平行して幅約0.6mで床面より一段高く設けられており、断面台形の堤で仕切られている。この堤には、屍床と床を繋ぐトンネルが玄門とほぼ同じ幅で二カ所設けられ、玄門中央に伸びる溝と連結して排水装置としての機能をはたしている。玄門は、立面が幅約0.7m、高さ0.74mのアーチ状で、羨道は約0.6mと短い。前庭部及び墓道については、詳しい調査報告がなく現状でも不明瞭だが、発見当初の写真からは天井部がなく、丘陵の傾斜を考慮すると非常に規模の小さいものであった可能性が高い。

出土遺物は、屍床の南部に切先を奥壁側に向けて鉄刀が一点と、その付近より鉄環が一点見つかっている。また、玄門近くの排水溝付近から刀子が一点出土している。遺物の出土状況から右壁（南壁）側に遺骸の頭部があったと推定されている。遺物からこの横穴の造営時期を判断するのは難しいが、横穴の構造と周囲の横穴より出土した須恵器高坏などから六世紀後半〜七世紀初頭とされている。

史跡指定された翌年に、コンクリート防護壁を設けるなど、当時としては非常に手厚い保存

整備がされた。以来、随時公開されてきたことにより地元住民をはじめ多くの人々に親しまれてきた。しかし、経年や公開環境から劣化が進んだため、近年大規模な修復が実施されることとなった。修復事業により、内外部・公開環境などの全体環境が改善され、平成二〇年に再公開が果たされたが、同時に新たな学問的課題が明らかになった。それは、奥壁の壁画について劣化や故意に傷つけられた部分をCG技術を用いて画像上で復元するという試みの中で見

られた。奥壁の壁画には手を繋ぐ男性人物が描かれているが、その下には横線がある。今までこれといった解釈はされていなかったが、画像解析によりこの横線の右端は内側に鋭く屈曲していることがわかった。実はこの横線と平行する横線が描かれており、屈曲した線の行き先と接続すると推定すると船のような乗り物になる可能性がある。詳しい分析が待たれるが、壁画解釈に新たな展開が期待されている。



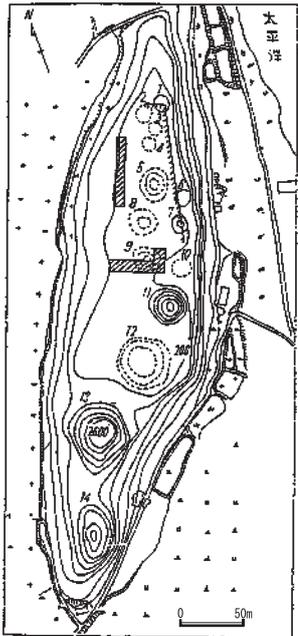
泉崎横穴内部と奥壁人物平行線の様子



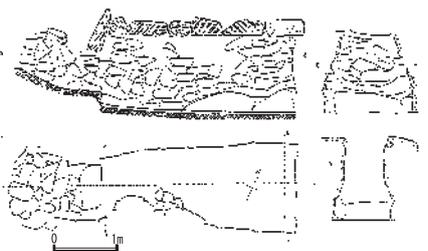
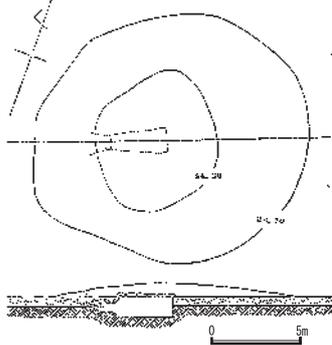
墳丘と横穴式石室



入道古墳群第1・2号墳



古墳分布図



第2号墳の墳丘と埋葬施設実測図



移築された第11号墳の埋葬施設近くに建つ記念碑



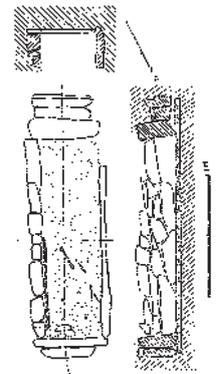
第2号墳埋葬施設類例資料（磯崎東古墳群2011年度第1号石室）



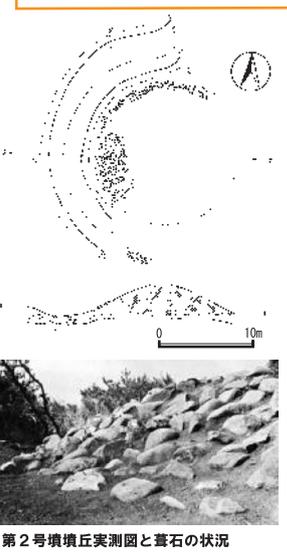
第12号墳出土壺形埴輪



移築された第11号墳の埋葬施設



三ツ塚古墳群第2・11・12号墳



第2号墳墳丘実測図と葺石の状況



第2号墳横穴式石室実測図



第2号墳出土フラスコ形瓶



第2号墳出土土刀装具

新道古墳群第2号墳の埋葬施設と出土遺物

見学ガイド

- \* 磯合古墳群赤坂稲荷古墳は、稲荷神社として残っており、墳丘を見ることができます。ただし、現在震災の影響で、墳丘内への立ち入りはできません。また、石室も見学できません。
- \* 三ツ塚古墳群第11号墳の埋葬施設は、平磯中学校敷地内に保存されています。学校敷地内のため、事前に学校の許可を得てから見学してください。
- \* 古墳から出土した遺物の一部は、ひたちなか市埋蔵文化財調査センターの標本陳列室に展示しております。

# ひたちなか市の古墳

## 2 海岸線の古墳群 —磯合・入道・三ツ塚・新道古墳群—

ひたちなか市の磯崎から平磯にかけての海岸線には、前回ご紹介した磯崎東古墳をはじめとして、北から順に磯合・入道・三ツ塚・新道古墳群とたくさん古墳が連綿と存在しています。

**磯合古墳群**は、磯崎東古墳群から続く古墳群で、26基の古墳が記録されています。現在は、畑の中に石室に使用した石材を見ることができくらいで、その多くが消滅しています。墳丘が残されている古墳の一つに、赤坂稲荷古墳があります。この古墳は、直径約26.5m、高さ約4mの円墳です。埋葬施設は、墳丘南側に横穴式石室が確認できます。当古墳からは、埴輪等の遺物が出土していないため、7世紀頃の時期の古墳と考えられます。

**入道古墳群**では、11基の古墳が記録されています。これらの古墳の大半が、直径約20m、高さ約2mの円墳です。この他にも、墳丘を持たない石室が多数あることが記されています。このような古墳群の様相は、磯崎東古墳群や磯合古墳群と類似します。1974年には、2基の古墳が発掘調査されています。第1号墳は、南北10.5m、東西12.0mの楕円形で、高さは約2mを測ります。埋葬施設は、縦穴式石室で、大刀1口と鉄鏃1個が出土しました。時期は、5世紀後半と考えられます。第2号墳は、直径約15m、高さ約3mの円墳と推定されています。墳丘には40cm前後の石を用いた葺石がみられます。埋葬施設や遺物は出土していません。

**三ツ塚古墳群**は、14基の古墳で構成されています。古墳は円墳が主体で、第13号墳のみ帆立貝形の可能性があります。古墳の規模は、直径10mの小型のものから、50mを超える大型のものがみられます。発掘調査は1949年と1957年に実施されています。調査の詳細については、『埋文だより』第29号に掲載していますので、ここでは一部の古墳のみご紹介いたします。第12号墳は、直径50.9m、高さ4.2mの大型円墳です。墳丘には葺石がみられます。注目されるのは、出土遺物の胴部が細長く、口縁部が段を有して開く壺形埴輪です。この埴輪は非常に珍しい形状で、現在調査が行われている大洗町の日下ヶ塚（鏡塚）古墳や車塚古墳との関係が注目されています。第2号墳は、直径約12m、高さ約1mの低墳丘の円墳です。埋葬施設は、地山を掘り込んで造られた横穴式石室で、羨道部は地表から玄室に向かって斜めに下がっていきます。このような特徴的な埋葬施設は、2011年度に実施した磯崎東古墳群の調査でも多数確認されています。

**新道古墳群**は、1987年に2基の古墳が発掘調査されています。2基とも墳丘はなく、埋葬施設は第2号墳が横穴式石室です。第2号墳からは、須恵器のフラスコ形瓶1点と金銅製の刀装具4点が出土しています。第2号墳の時期は、7世紀前半と考えられます。

以上のように、これらの古墳群には、葺石の存在や特徴的な横穴式石室、墳丘を持たない石室、埋葬施設に海岸の石を使用しているなど、多くの共通点がみられます。よって、これらの古墳群は、5世紀から7世紀にかけて海岸線に沿って造営された、大規模な一つの古墳群と考えられます。



赤坂稲荷古墳の



第1号墳埋葬施設（大刀出土状



**ミニ知識**  
三ツ塚古墳群第12号墳頭の年代が推定されることも古い古墳となります。

\* 古墳の場所や市内の古墳の概要については、『埋文だより』第37号をご覧ください。

茨城県において先石器時代の遺跡が調査されたのは一九六九（昭和四四）年、高萩市赤浜遺跡が最初である。それ以来、先石器時代関係の遺跡の調査の機会を求めてきたが、実現できないでいた。一九七五（昭和五〇）年に勝田第三中学校の安島功先生から勝田市（当時）後野地内において石器が採集された旨の連絡が勝田市教育委員会に入った。発見者は同校二年の栗田茂樹君であった。鴨志田篤二氏から連絡を受けて、当時勝田市史編纂の資料整理をしていた星田享二氏らと現地へ赴いた。現地は表土がかなり削られてはいた。念のためテストピットを入れてみると破壊はローム面には及ばず、その直上から石斧が検出されたのである。石器はそれまで茨城県下はもとより関東地方でも見たこともないものであった。調査の価値があると考え、市教育委員会に要請し調査を実施することにしたのである。

調査は同年八月七日から九月二日まで行った。この期間にもう一つ、重要な調査が茨城県史編纂の目的のために行われていた。東京大学の佐藤達夫先生による山方遺跡の調査である。一日の調査が終わると山方遺跡の佐藤先生に電話を入れ情報交換と調査のアドバイスをいただくのが日課となった。山方遺跡の調査が終わると佐藤先生を始めとした調査団が来跡された。そのころ、ローム層から出土する石器の調査中であったが、ローム層から土器が出ることにとまどっていた。佐藤先生から青森県大平山元遺跡からも後野遺跡と同

## 出会い、別れ、そして夢考古学の旅路

### 第11回 勝田市の遺跡の調査(4) ー後野遺跡ー



1975(昭和50)年9月 後野遺跡B  
地点の現地説明会(奥中央に川崎)



川崎 純徳

じような石器群に土器が伴っていることを伝えられたのである。佐藤先生と何回となく後野遺跡のA地点、B地点の石器の出土位置を確認した。その後も調査中に訪れられ、終了後もご指導をいただいた。まもなく佐藤先生は、病後もご指導をいた入院され、病床に出来上がったばかりの報告書をお届けしたのは一九七六（昭和五一）年のことであり、間もなく逝去されたのである。

調査が終わって、明治大学に杉原荘介先生を訪ねて出土資料についてご教示をいただいた。明治大学所蔵の新潟県荒屋遺跡や北海道白滝服部台、山形県角二山遺跡等の資料を見させていただいた。その後、後野遺跡の調査の成果は日本における先石器時代終末と土器発生の研究に多大な影響を与えることとなった。それまで細石刃と大型石刃文化の関係は不明であった。大型石刃文化を代表する遺跡に青森県長者久保遺跡や長野県神子柴遺跡が知られていた。後野遺跡は長者久保遺跡、神子柴遺跡と同じ内容のものであった。ここでの成果は大型石刃文化と細石刃文化の新旧関係を層位的に明らかにしたことであった。

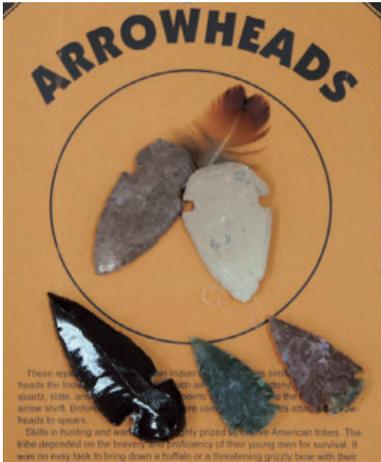
それまでは九州地方の細石刃文化が、日本列島各地に広がっていったと考えられ、土器も細石刃文化の中に生まれたとされてきた。後野遺跡や大平山元遺跡の発掘の成果は先石器文化の最終末にシベリヤ方面の石器文化が東北日本に伝播し、各地に広がっていったことを示していた。これは先石器時代研究の定説を覆す成果であった。

\*川崎純徳氏のプロフィールは、連載第1回(『埋文だより』第29号)に掲載してあります。但し現在では、茨城県考古学協会の会長を退任して顧問。

# たかのす 鷹ノ巣遺跡のアメリカ式石鏃

—茨城県域の資料から窺う威信財としての変化—

鈴木 素行



「アメリカ式石鏃」と呼ばれる特徴的な形態の石器が、弥生時代に見られます。ひたちなか市域にも分布し、鷹ノ巣遺跡からは6点が出土しました。狩猟具として使用されていた石器ですが、墓に副葬されることもあり、大型品が製作されるようにもなります。茨城県域の資料から、アメリカ式石鏃の威信財としての変化を追跡してみました。

## アメリカで販売されている石鏃模造品

### 1 鷹ノ巣遺跡第47号住居跡の調査から

二〇〇五年度に実施されたひたちなか市鷹ノ巣遺跡の調査では、第47号という弥生時代後期前半の住居跡から、五七点ものガラス小玉が出土して注目された。この住居跡には、アメリカ式石鏃五点、有茎石鏃一点も伴出している。隣接する後世の住居跡から出土した一点を含めて、アメリカ式石鏃はほぼ一か所に集中し、全てが完形の状態で見残されていた(図1)。本稿では、茨城県域に報告されたアメリカ式石鏃の集成と観察に基づき、関連の資料も提示しながら、威信財としてのアメリカ式石鏃について検討する。

### 2 アメリカ式石鏃の分布

アメリカ式石鏃の呼称は、基部にT字形の茎(なかご)を作出した特徴的な形態が、北アメリカで発見されていた石鏃に類似することから用いられるようになった。一九九六年の石原正敏によれば全国から二〇〇を上回る遺跡が集成され、東北地方の南・中部に集中する分布が捉えられている。関東地方については、二〇〇〇年に岡本孝之が「大根布式石鏃」の呼称でこれを検討し、北東部への集中を指摘した。岡本の集成からは高部宮ノ前遺跡「小宮一九八四」など千葉県域の分布が漏れたが、太平洋側における大よその南限を茨城・栃木県域と見ることに変更はない(図2)。

岡本は二〇〇三年に集成の補遺を行い、茨城県域に一四遺跡二四点を認めた。本稿では、さらに九遺跡一四点をアメリカ式石鏃として追加する。

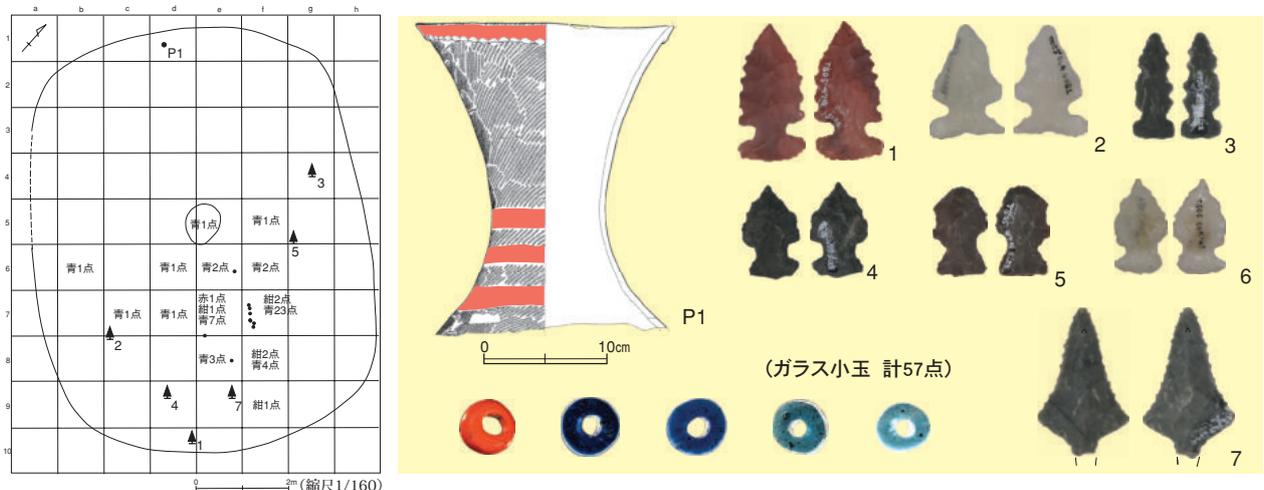


図1 鷹ノ巣遺跡第47号住居跡のアメリカ式石鏃とガラス小玉 (石鏃縮尺2/3)

「鷹ノ巣遺跡のアメリカ式石鏃」には次の方々と機関からお世話をいただきました 青木義一氏、・渥美賢吾氏(水戸市教育委員会)・石井聖子氏(常陸大宮市歴史民俗資料館)・大内 要氏・大谷昌良氏(筑西市教育委員会)・岡本孝之氏・小山映一氏・加藤 忠氏(笠間市教育委員会)・川崎純徳氏・川又清明氏(茨城県立歴史館)・窪田恵一氏・黒澤春彦氏(上高津貝塚歴史の広場)・越田真太郎氏(桜川市教

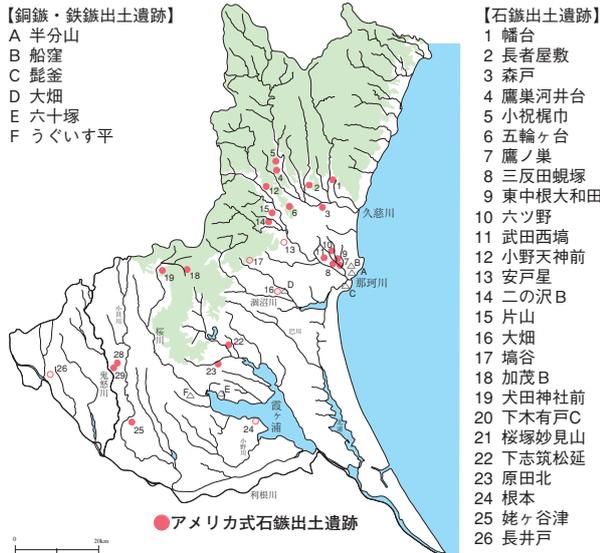


図3 茨城県におけるアメリカ式石鍬と関連資料の分布

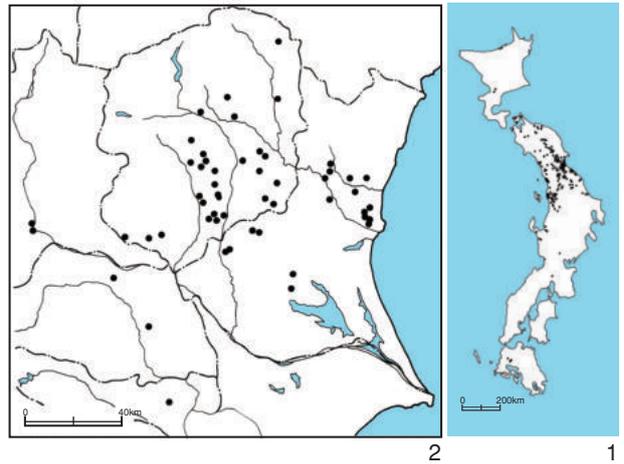


図2 アメリカ式石鍬の分布  
 (1は石原1996, 2は岡本2000・2003を原図に作成)

同一遺跡もあるので、合計では二一遺跡三八点ということになる。遺跡は、北部の久慈川・那珂川流域に多く分布し、一遺跡に五点以上が検出されている幡台遺跡と梶巾遺跡は久慈川流域、鷹ノ巣遺跡は那珂川流域に位置する(図3)。

**3 茨城県域のアメリカ式石鍬**

二一遺跡三八点のアメリカ式石鍬に対して、実物が観察できたのは二一遺跡二八点であった。本誌の特性を活かし、その全てをカラー写真で掲載する(図4)。他の資料については、岡本論文もしくは原報告を参照されたい。

**欠損** 先端を僅かに欠くものはあるが、特に、発掘品には完形が多い。アメリカ式石鍬という特定に至らないものを含む有茎の石鍬としては、欠損が茎部に集中する傾向を認める。これは、鷹ノ巣遺跡に共通する遺存状態である。

**法量** 長さの最大値は武田西塙遺跡(24)の47.8mm、最小値は梶巾遺跡(17)の14.0mmである。ほとんどが15.0~30.0mmの範囲に収まるのに対して、抜きん出た大型が存在する。30.0mm以上をI型、30.0mm未満をII型と呼んでおく。鷹ノ巣遺跡は全てII型である。

**形態** 各部位の形状の異なりで細別はできるが、まずは、幅の最大値の位置による二大別に止め、茎部に最大幅があるものをA形、基部に最大幅があり茎部が小さなものをB形と呼んでおく。鷹ノ巣遺跡は全てA形である。I型にはB形のみが見られる。部位の形状で注目しておきたいの

は、鷹ノ巣遺跡(5)、梶巾遺跡(19)の先端部の丸みであり、これらはII型に出現している

**石材** 半数ほどをチャートが占め、メノウが次ぐ。その他には多種の石材が利用されているが、遠隔地の石材と判断されるものは見られない。

**製作痕** 素材剥片の剥離面あるいは節理面を残すものが少なくない。河井台遺跡(14)は、周縁を整形しただけで、縦断面には剥片の湾曲がそのまま残されている。

**使用痕** 鷹ノ巣遺跡では二点(2・5)に先端部の摩滅を観察している。発掘品では、犬田神社前遺跡(33)のI型にもこれを認めた。一方で、加茂B遺跡のI型の二点は全体としても、使用の痕跡を観察できなかった。加茂B遺跡に共伴した無茎石鍬には先端の摩滅を認めている。

**編年** 茨城県域では、中期以前の事例は確認されていない。後期前半の鷹ノ巣遺跡は全てII型A形であった。後期前半では、大和田遺跡もII型A形であり、姥ヶ谷津遺跡もII型A形と推定される。後期後半の加茂B遺跡は二点ともI型B形である。犬田神社前遺跡もI型B形であり、武田西塙遺跡のI型B形も後期後半と推定される。一方で、後期後半の下木有戸C遺跡はII型A形であり、梶巾遺跡のII型A形も後期後半と推定せざるを得ない。I型B形は、II型A形から派生したものと考えられることになる。これはまた、茨城・栃木県域という分布の南東端部に成立した地域的な型式として捉えることができそうである。



図4 茨城県域出土のアメリカ式石鏃  
と関連資料 (縮尺2/3)

番号	所在地	遺跡	遺構	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	文献	備考
1	ひたちなか市	鷹ノ巣	47住	赤玉石	28.1	13.9	6.3	1.7	鈴木・窪田2013	
2	ひたちなか市	鷹ノ巣	47住	メノウ	23.1	15.0	5.2	1.4	鈴木・窪田2013	
3	ひたちなか市	鷹ノ巣	47住	チャート	21.9	8.4	4.0	0.6	鈴木・窪田2013	
4	ひたちなか市	鷹ノ巣	47住	ホルンフェルス	19.2	11.5	2.5	0.6	鈴木・窪田2013	
5	ひたちなか市	鷹ノ巣	47住	チャート	18.7	11.2	5.3	1.0	鈴木・窪田2013	
6	ひたちなか市	鷹ノ巣	50住	メノウ	19.3	11.0	3.5	0.7	鈴木・窪田2013	
7	ひたちなか市	鷹ノ巣	47住	チャート	>29.5	17.7	6.7	2.2	鈴木・窪田2013	基部欠
8	常陸太田市	幡台	採集	チャート	>17.1	19.8	4.4	1.4	岡本2003	
9	常陸太田市	幡台	採集	赤玉石	>16.5	>14.0	3.3	0.6	初出	
10	常陸太田市	幡台	採集	珪質頁岩	>19.0	18.2	3.9	1.0	岡本2003	
11	常陸太田市	幡台	採集	赤玉石	14.4	10.3	3.2	0.5	岡本2003	
12	常陸太田市	幡台	採集	流紋岩	>26.2	14.7	6.1	1.8	岡本2003	
13	常陸太田市	幡台	採集	チャート	22.2	8.6	4.4	0.7	岡本2003	
14	常陸大宮市	鷹巣河井台	採集	チャート	18.8	12.3	2.8	0.5	岡本2000	
15	常陸大宮市	小祝榎市	採集	メノウ	20.4	15.2	3.7	0.8	岡本2000	
16	常陸大宮市	小祝榎市	採集	チャート	16.8	11.1	3.6	0.6	岡本2000	
17	常陸大宮市	小祝榎市	採集	メノウ	14.0	8.4	2.9	0.3	岡本2000	
18	常陸大宮市	小祝榎市	採集	チャート	16.2	8.6	3.3	0.4	岡本2000	
19	常陸大宮市	小祝榎市	採集	メノウ	16.1	12.9	4.2	0.9	阿久川1977	
20	常陸大宮市	小祝榎市	採集	チャート	20.0	9.6	4.4	0.6	岡本2000	
21	常陸大宮市	小祝榎市	採集	メノウ	25.2	>10.2	5.5	1.2	岡本2000	
22	那珂市	五輪ヶ台	採集	トロト石	>33.6	14.8	5.0	1.8	初出	
23	ひたちなか市	六ツ野	採集	チャート	18.7	>12.0	3.7	1.0	岡本2003	
24	ひたちなか市	武田西端	調査区	珪質頁岩	>47.8	21.0	6.5	3.5	鈴木木2001	
25	水戸市	二の沢B	11住	チャート	>28.5	18.0	4.6	2.2	江幡2003	基部欠
26	城里町	片山	採集	メノウ	30.7	12.2	5.4	1.7	小山1988	
27	城里町	片山	採集	メノウ	22.1	10.2	4.4	0.8	小山1988	
28	茨城町	大畑	3住	チャート	>20.9	13.0	3.9	0.8	長谷川1998	基部欠
29	笠間市	塙谷	調査区	チャート	>21.6	10.7	3.1	0.7	浅間2011	基部欠
30	笠間市	塙谷	調査区	チャート	>21.0	14.6	3.4	0.9	浅間2011	基部欠
31	桜川市	加茂B	7住	チャート	45.0	21.0	7.5	4.8	川井2008	
32	桜川市	加茂B	7住	チャート	39.0	18.5	4.0	2.7	川井2008	
33	桜川市	大田神社前	316住	チャート	32.2	13.7	5.4	1.7	寺内2007	
34	筑西市	下木有戸C	2住	メノウ	21.3	13.3	3.8	0.8	河野2011	
35	土浦市	原田北	76住	頁岩	>27.0	14.0	4.6	1.0	海老澤2011	基部欠
36	土浦市	原田北	59坑	チャート	26.2	15.7	5.2	1.9	海老澤2011	
37	土浦市	原田北	59坑	オーバー	14.8	11.0	3.3	0.4	海老澤2011	有茎鏃
38	土浦市	原田北	59坑	チャート	18.8	14.7	2.7	0.7	海老澤2011	無茎鏃
39	美浦村	根本	7住	チャート	>26.4	12.6	4.3	0.9	中村2011	基部欠
40	境町	長井戸	14住	チャート	25.9	14.8	6.8	2.2	鹿島2011	有茎鏃
41	境町	長井戸	29住	チャート	>19.0	10.2	3.0	0.6	鹿島2011	基部欠

4 アメリカ式石鏃のⅠ型とⅡ型  
アメリカ式石鏃のⅡ型は、佐原真「一九六四」、松木武彦「一九八九」の分類でも、狩猟具として評価される法量である。長幅比(長さ/幅)では、1.7付近へ集中しつつも、ばらつきが見られる(図5)。これには、欠損した先端部の再生があったことを考えておきたい。欠損した分だけ長さを減じることになり、1.7付近を限界値として再生されていたのであろう。丸みのある先端部の形状の出現も、欠損部を調整したことによるのではないかと、原田北遺跡の第59号土坑では、

\*1 石材の名称は、柴田 徹・山本 薫・鈴木素行1998「武田石高遺跡から出土した石材の石質と石材採取地について」『武田石高遺跡 旧石器・縄文・弥生時代編』による。

\*2 「十王台式」の細別は、鈴木素行2013「旅する「十王台式」」『ひたちなか埋文だより』第38号による。

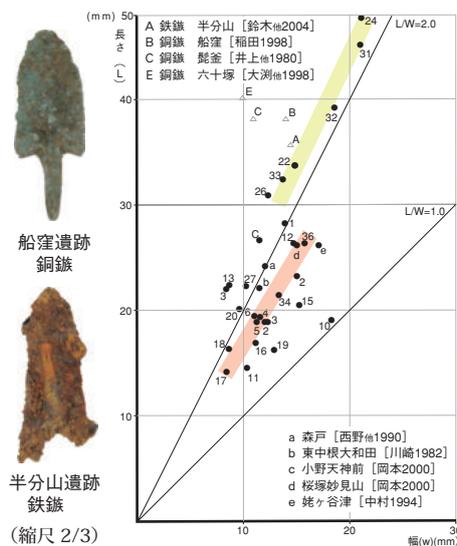


図5 アメリカ式石鍔、銅鍔、鉄鍔の長さと同幅

アメリカ式石鍔に無茎鍔が相伴している。茎部を欠損したアメリカ式石鍔が無茎鍔と同じ方法で矢柄に装着されたことも考慮しなければならない。つまり、摩滅という痕跡とともに、これら欠損に関わる現象は、Ⅱ型が実際に使用された狩猟具であったことを示すと考えられるのである。

一方のⅠ型は、戦闘具として評価される法量を備えている。しかしながら、茨城県域の弥生時代後期は環濠などの防御施設をもたず、戦闘具が量産された痕跡も認められない。長幅比が2.2付近に集中してはつかないのは、製作時の法量と形態をとどめていることによるのであろう。摩滅の痕跡から使用が推定されるものもあるが、特に抜きん出た大型は、使用されることなく、専ら見せるための威信財として機能したことが考えられるのである。

東海地方以西において大型の石鍔が盛行するの

は中期であり、これとの直接的な関係は時期的にも認めがたい。大型化の契機は石器ではなく、銅鍔や鉄鍔などの金属器にあつたものと考えられる。アメリカ式石鍔に金属製の戦闘具の法量を実現することで、威信財としての差別化が図られたのであろう。矢柄への装着に機能する茎部をそのままに鍔身を大型化させることで、B形が成立することになったのかもしれない。

### 5 威信財としてのアメリカ式石鍔

福島県桜町遺跡「福田他二〇一」9号周溝墓(図6)の主体部69号土坑、新潟県八幡山遺跡「渡邊他二〇〇一」S X 100号方形周溝墓の主体部からは、アメリカ式石鍔が検出され、副葬品と考えられている。茨城県域では、原田北遺跡第59号土坑が規模と形態、さらに覆土の状況から墓壙と推定され、アメリカ式石鍔を含む三点の石鍔が検出されている。アメリカ式石鍔は威信財として副葬されるものであつたことがわかる。

鷹ノ巣遺跡の第47号住居跡については、アメリカ式石鍔とともに五七点のガラス小玉が検出されている。ガラス小玉は、加茂B遺跡第7号住居跡でもアメリカ式石鍔、根本遺跡第7号住居跡では有茎の石鍔(39)と伴出し、安戸星古墳でも墳丘中に有茎の石鍔が共存していた。これらの事例も副葬品であつて、住居跡については「屋内墓」ではなかつたかと考えている[鈴木二〇一〇]。

茨城県域における弥生時代中期の副葬品は、勾玉・管玉などの玉類、オオツタノハ・サトウガイ

を素材とした貝輪など装身具に限定されていた。後期前半になると、玉類ではガラス玉が主体となり、石鍔が副葬されるようになる。アメリカ式石鍔は狩猟具としての法量を示しながら、威信財としての差別化は数量により表現されている。後期後半になると、「十王台式2・3期」には金属器の法量を模倣した大型品が出現することになる。これは、「十王台式4・5期」に銅鍔や鉄鍔が普及することで姿を消すのであろう。

Ⅰ型でも抜きん出た大型と推定される二の沢B遺跡のアメリカ式石鍔(25)は、発掘品でありながら、大きく破損し、被熱と思われる痕跡も残る。

同じ第11号住居跡の覆土中から鉄鍔の茎部だけが出土しているのは、なにより威信財の交替を象徴しているかのように見えるのである。

#### 主要参考文献

石原正敏一九九六「アメリカ式石鍔再考」『考古学と遺跡の保護』／海老原郁雄二〇〇四「アメリカ式石鍔とその周辺」『唐沢考古』二三／岡本孝之二〇〇〇「関東の大根布式石鍔」『利根川』二二／岡本孝之二〇〇三「茨城県における弥生文化観の再検討」『茨城県史研究』八七／佐原真一九六四「石製武器の発達」『紫雲出』(二〇〇五「戦争の考古学」による)／鈴木素行二〇一〇「統・部田野のオオツタノハ」『古代』一二三／鈴木素行・窪田恵二〇一三「鷹ノ巣遺跡第四七号住居跡における石英を素材とした石器について」『鷹ノ巣Ⅱ』／松木武彦一九八九「弥生時代の石製武器の発達と地域性」『考古学研究』三五・四 報告書類は省略

図6 福島県桜町遺跡9号周溝墓 (福島県文化財センター提供)

# 文 埋 センターの 日 々 2013 前期

4月

- 4 愛知県大山市古代遊学会見学／ひたちなか市新人研修会／47 虎塚古墳一般公開／5 古代を学ぶ会見学／東海村の環境調べ隊見学
- 13 水戸市内原小学校へ資料貸出【井上資料縄文土器ほか】／27 水戸市内原小学校より資料返却

5月

- 2 津田小学校6年生社会科見学



- 9 橋本勝雄氏資料見学【東石川新堀遺跡(石鏃)・資料寄贈(植刃器ほか)】



12 第10回企画展「旅する」十王台

式」終了／14 那珂市菅谷西小学校6年生社会科見学



16 望月友弘氏資料寄贈【笠間市愛宕山旧石器】／17 ワンケースミュージアム27 「ひたちなか市で焼かれた天平の蓋」開始／遺跡めぐり／18 見学者



22 茨城町の歴史を学ぶ会見学／鹿島まちづくりセンター見学／ひたちなか市教育指導室主任研修会／常陽史料館より資料返却【乳飲み児埴輪レブリカ】／渡辺明氏資料寄贈【市内出土土器】／23 中根小学校6年生社会科見学



25 虎塚古墳周辺清掃(ときわ会)／28 中根小学校3年生社会科見学



31 井博幸氏資料寄託【星神社古墳出土埴輪】

6月

6 銚田市旭東小学校6年生社会科見学／7 佐野小学校6年生社会科見学



11 外野小学校3年生社会科見学



12 那珂湊第三小学校6年生社会科見学／藤本武氏資料寄贈【市内出土土器ほか】／13 ひたちなか市教育研究会／18-25 ひたちなか市教育委員



11 ホタルブクロ

虎塚古墳の森で初夏を告げる花のひとつが、今回ご紹介するホタルブクロです。この花は、キキョウ科ホタルブクロ属で、別名チヨウチンバナとも呼ばれます。別名のように、花は大きな鐘状の赤紫色の花を穂状に数個つけます。日本でよく見られる植物で、全体の大きさは二〇〜五〇cmです。葉はハート形をしています。花色には、赤紫色のものと白色のものがありますが、虎塚古墳の森には赤紫色のものがみられます。

花の名前の由来には、ホタルを花の中に入れて遊んだから、などの説があるようですが、この花を撮影するときには、ホタルではなく蚊が大量に寄ってきます。ですので、花を見たからだけでなく、かゆい！という体験からも初夏を感じるお花です。

(稲田健一)



2005.6.23

会市民憲章文化部会

7月

2 田彦小学校3年生社会科見学



4 十五郎穴横穴墓群対策会議

5 千葉隆司氏(かすみがうら市郷土資料館)

資料調査【武田遺跡群炭化種表】

6 博物館実習施設見学(茨城キリスト教大)

9 平磯小学校6年生社会科見学

9-12 / 11 かすみがうら市郷土資料館へ資料貸出

【武田遺跡群炭化種表】

12 牛久歴史リレー講座見学 / 9-16

10 ひたちなか市交通安全

全教師の会研修会 / 17 ワンケー

スミュージウム27終了 / 19 ワン

ケースミュージアム28 「0からの

縄文原体」開始 / 20 ふるさと考

古学①「楽(うた)考古学」(講師・さ

かひろひ氏) / 21 ふるさと考

古学②「土器の考古学」(講師・

佐々木義則) / 24-30 ひたちなか

市英語インタラクティブフォーラ

ム練習会 / 26 小坂時子氏(奈良大学

通信学生)資料見学(向野遺跡土偶) / 柳沼

賢治氏(郡山市文化学び振興公社)資料見

学(武田遺跡群ほか出土土器) / 27 ふる

さと考古学②「土器の考古学」(講

師・綿引逸雄氏)

8月

5 太田博樹氏(北里大学医学部准教授)他資

料調査(十五郎穴横穴墓群35号墓人骨)



20

21-27 博物館実習(茨城キリスト教大)

八州学園大学)



24 西川修一氏ほか資料調査(十五郎

穴横穴墓群館出支群第35号墓土器)

25 ふるさと考古学④「土器の考古学」

(講師・綿引逸雄氏) / 28 質問対

応(夏休み自由研究)

31 ふるさと考古学⑤「骨の考古

学」(講師・小宮孝氏)

9月

3 茨城県立歴史館特別展「はに

わの世界」へ資料貸出(井上コレクション

埴輪) / 6 袴田昭孝氏資料寄贈(本郷東

遺跡土器) / 12 収蔵資料修繕(埴輪)

ワンケースミュージアム28終了

26 平磯小学校出張授業(火起こし)



入館者状況 (2013.4.1 ~ 2013.9.30)

月	開館 日数	個人		団体		計 (人)
		(人)	(団体)	(人)	(団体)	
4月	25	476	5(0)	120(0)	596	
5月	27	304	8(4)	545(310)	849	
6月	26	189	7(4)	530(478)	719	
7月	26	206	14(2)	506(214)	712	
8月	27	247	11(0)	158(0)	405	
9月	25	117	2(0)	78(0)	195	
合計	156	1539	47(10)	1937(1002)	3476	

( )内は学校数

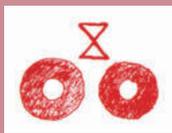
ひたちなか市埋蔵文化財調査センター及び(公財)ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社が開催する事業は『ひたちなか市報』及び下記のホームページでお知らせいたします。  
http://business4.plala.or.jp/h-ics/

編集後記の 笑う埴輪

ポリエチレンのレジ袋が普及する前、スーパーでも茶系の紙袋が主流だった時代の話。この紙袋を材料に、縄文原体を学習していた。短冊状に切り、手でよく揉んでから撚りかける。厚手で丈夫な紙なので、油粘土に回転させると圧痕が明瞭に表れる。ただ、何本も撚っていると指にマメができるのが難点だ。これに対して、ストローの紙袋は指にやさしい。夏場に喫茶店でアイスコーヒーを注文すると、癖になっているのだろう、ついつい縄文原体を作ってしまうのだった。

ワンケース・ミュージアム「0からの縄文原体」は、「ふるさと考古学」で土器を作る子供たちのための入門編の展示なので、自分が縄文を学び始めた頃を思い出しながら、ポスターを作成してみた。テーブルの上、アイスコーヒーの脇に、ストローの紙袋で作られた縄文原体が置いてある。その写真を、喫茶店に許可をいただいて撮影した。

お気付きだろうか。あの長さの単節斜縄文の原体は、一本のストローの紙袋では作ることができない。材料には二人分の紙袋が必要。ということで、前の席には、もう一人座っているという設定なのであった。ただ、彼女がなにを飲んでいたので、いままでは思い出すことができない。



ひたちなか埋文だより 第39号

編集 公益財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社

2013年10月31日発行

発行 ひたちなか市埋蔵文化財調査センター

〒312-0011 茨城県ひたちなか市中根3499 ☎029-276-8311 FAX 029-276-3699

印刷 大富印刷株式会社

表紙のモデルは須田早央里さんです。